

[別紙 2]

審 査 結 果 の 要 旨

氏名 境 洋二郎

本研究は、不安障害の代表疾患であり、罹患率が高く、罹患により患者の生活の質を大きく低下させる疾患である、パニック障害の患者に対し、PET(positron emission tomography)を用いて、脳内のグルコース代謝を測定し、脳内機能の評価を試みたものであり、下記の結果を得ている。

1. 治療前のパニック障害患者群は、正常統制群と比較して、両側扁桃体、海馬、視床、及び、背側の橋下部から延髄にかけての脳幹部、小脳において有意なグルコース代謝亢進を認めた。
2. 治療前のパニック障害患者群は、正常統制群との比較において、有意なグルコース代謝低下領域は認めなかった。
3. 認知行動療法が有効であった患者群では、治療前と比較し治療後において、左内側前頭前野、右前部帯状回、右下後頭から右中側頭領域、左上頭頂領域に有意な代謝亢進を認めた。
4. 認知行動療法が有効であった患者群では、治療前と比較し治療後において、右海馬、橋中部、左小脳、左被殻領域において有意な代謝低下を認めた。
5. 認知行動療法前後の有意所見領域のグルコース代謝と、パニック障害重症度との相関の評価において、右海馬と有意に正の相関、左内側前頭前野と有意な負の相関を認めた。

以上、本論文はパニック障害患者の脳内グルコース代謝を、治療前の段階で、正常統制群と比較することにより、病勢の盛んな時期の脳内機能の評価し、認知行動療法前後で比較することにより、その作用脳内機序を評価した。本研究

は、動物実験等により言われている神経解剖学的仮説を、パニック障害患者を対象とした、機能的神経画像研究で初めて支持する所見を示しており、パニック障害の脳内機序の解明や、今後の治療の発展において重要な貢献をなすと考えられ、学位の授与に値するものと考えられる。